

「分かったつもり」をどのように捉えるか： ヴィゴツキーおよびヤクビンスキーのモノローグ論から

田 島 充 士
高知工科大学

Investigating the structure of “partial understanding”: Monologue in the theory of Vygotsky and Jakubinskij

Atsushi TAJIMA
Kochi University of Technology

Summary

This study investigated the structure of “partial understanding” and “understanding” from the perspective of L.S. Vygotsky. This paper discusses the theories of Russian formalists, paying particular attention to the work of L.P. Jakubinskij as a precursor to Vygotsky’s semiotics. Jakubinskij’s framework of “dialogue” and “monologue” influenced Vygotsky’s ideas of “development”; dialogue refers to the semiotic interaction form “in” a context, and monologue refers to the interaction form “between” contexts. The structure of understanding is thus interpreted as the capacity of speakers that enables communications beyond the boundaries of exclusive contexts gained through “zones of proximal development”.

1. はじめに

日常生活文脈の中でよく使用することばほど、その意味内容を問われると答えられなかったという経験のある方は少なくはないだろう。

かつて筆者は、ある自動車工場を見学したとき、そこで頻りに交わされていた「トルク」ということばの意味が気になり、責任者にその意味を聞いたことがあった。自動車整備士として20年近いキャリアがあり、工場の中で必要とされる知識をきわめて豊かに有していた彼は、当然のことながらこの概念についても仲間との間で自在に操り、仕事をこなしていた。しかし、工場の見学者である筆者のこの質問に対し、彼は答えることができなかったのである。

「よく覚えてないねえ。むしろ、こういうことは若い人の方がよく知っているんですよ。我々は昔に習ったことだから、もうとっくに忘れていきますねえ。普段、こう

いうことを聞かれることがないですからねえ。実際、我々の間ではそんなことは知っていて当然のことですから、あまり問題になることがないんですね。」

彼はその後、様々な資料を事務所の戸棚から引き出し調べてくれたが、結局、筆者の問いに対する答えをみつけることはできなかった。工場内では多くの若手整備士達から尊敬を集める知識通であった彼が、このような反応をしたことが筆者にとっては意外であり、ことばの「理解」とは何なのかという問題について考えるきっかけとなった（以上の事例はプライバシー保護のため、一部改変を施している。）。

筆者はこの後、他の様々な場面でも同様の現象がみられるかどうかを検証した。その結果、工場などの職場において流通している知識だけではなく、学校において教えられ、教室のやりとりの中で使用されている知識に関しても、その意味について質問を行うと学習者の多くが説明できない傾向があることを明らかにした。そしてこ

れを「分かったつもり」と呼んだ(田島, 2010; 田島・茂呂, 2003)。

しかし、たとえ分かったつもりに陥っているとしてみても、これらの学習者がそれらのことばを単に「理解」してしなかつたとはいえない。冒頭の事例においてもみられるように、ほとんどの場合、普段、共に生活文脈を生きる仲間との会話においては問題なくそれらのことばを使用できているからである。

このような言語的認識のパラドクス(特定の文脈に属する仲間間において成立していたことばの「理解」が、他の文脈に属する者との間においては成立しないということ)を検証する上で、ヴィゴツキーの言語論を検討することは有用だと思われる。ヴィゴツキーは、生活文脈において使用し慣れ親しんでいることばの意味内容について、子どもたちが彼らの生活文脈外から来た人などに説明できない傾向にあるという現象に着目し、この問題を含めた言語現象の分析から、発達の最近接領域に至る彼の言語発達理論を提唱したと考えられるからである(柴田, 2006)。さらに議論をさかのぼると、ヴィゴツキーの言語論に大きな影響を与えたといわれるロシア・フォルマリズム運動において展開された言語論の中で、このようなパラドクスは主要なテーマの一つとして分析がなされていた。

本論では、これらヴィゴツキーおよびフォルマリズムの言語論の観点から、言語的認識の構造について分析を行う。具体的には、フォルマリストの中でも特にヴィゴツキーの言語観に強い影響を与えたといわれる言語学者・ヤクビンスキーの著「対話のことばについて」に着目し(註1)、ヤクビンスキーとヴィゴツキーの言語論を比較検討することで、分かったつもりおよび理解の構造について考察を深めていきたい。

なお本論では、ロシア語で書かれた文献に関しては、日本語・英語・ドイツ語による訳書を参照した(註2)。また主要な文献に関しては、オリジナル原稿が発表された年を挿入し、引用箇所の数も示した。

2. ロシア・フォルマリズムにおける「実用言語」と「詩的言語」

ロシア・フォルマリズムとは、1910～20年代にかけ、「オボヤズ(詩的言語研究会)」を中心に展開された文学運動を示す。それまでの文学研究においてみられた、作

品内容に偏った分析手法を批判し、文学作品を自立した言語世界として捉え、テキストそのものとしての言語表現の方法と構造を対象に分析を行う立場をとっていた(オクチュリエ, 1996)。

オボヤズの中心メンバーであり、またフォルマリズムの主導者の一人とされるシクロフスキーは「言葉の復活」(1914)において、日常文脈の中で使用されることばに対する人々の、そのことば本来の意味内容に対する関心が失われるという現象に注目している。日常会話の中で使い古され慣用句となったことばは、もはやそのことばそのものが内蔵する意味・原義が忘れ去られ、ことば外の事象を指し示す指示器としてのみ、話者に認識されるというのである。

「今日、言葉は死に絶え、言語はあたかも墓場と化している。・・・たとえば、『月(メーシャツ)』、この語の原義は『計測器(メリーチュェリ)』であった。・・・フランス語の『子供(アンファン)』という言葉は(古代ロシア語の『子供(オートロク)』と同じく)文字どおり、言葉を話さない者を意味する。・・・日常会話で用いられ、そのため完全に聞き取られることもない言葉。・・・作品は慣れというガラスの壁に覆われているのだ。」(シクロフスキー, 1988a, pp.13-15)

このように、シクロフスキーが立ち上げた言語的認識論について、言語学の立場から体系化を行ったのが、ヤクビンスキーといわれる(桑野, 1979)。

まずヤクビンスキーは「詩語の音について」(1916)において、詩などの芸術文脈では、日常的なコミュニケーション手段として使用される「実用(日常)言語」とは異なる、言語的結合が自立的な価値を持つ言語体系が存在することを指摘し、これを「詩的言語」と呼んだ。

「もし話し手が伝達という純粋に実用的目的でそれを用いるならば、われわれは、日常的言語の体系を取り扱うことになる。その体系の中では、言語の表象(音、形態論的要素など)は独自の価値を持たず、伝達的手段でしかない。だが、実用的な目的が背後に退き、言葉の組合せが独自の価値をになうような言語体系も別に考えられる。・・・私はこの体系を仮に「詩語」と呼ぶことにする。」(ヤクビンスキー, 1971, p59)

またヤクビンスキーは「実用言語と詩的言語における

同一流音の重なり」(1917)において、日常的文脈の中でメッセージの伝達手段として使用される実用言語の認識を、ベルグソン(2007)の「物質と記憶」(1896)において記述された「自動現象」から援用して「自動化」されたものと呼んだ(ヤクビンスキー, 1988, p.37)。

これらシクロフスキーおよびヤクビンスキーの議論は、日常会話を交わす人々のことばに対する認識は、他者との具体的なコミュニケーション手段としてのものとなり、その慣習的な使用の中で、ことばそれ自体に対する意識が低下してしまうということが出発点となった。そしてシクロフスキーは「手法としての芸術」(1917)において、慣習的な言語活動によって忘れ去られた、初めてそのことばを学んだときのような人々の生き生きとした認識を取り戻すことが芸術(詩的言語)の目的であり、この目的を達成するための「形式を難解なものとして知覚をより困難にし、より長引かせる手法(シクロフスキー, 1988b, p.25)」を「異化」と呼んだ。

この自動化と異化について、Clark & Holquist(1984)が紹介する事例に基づき、具体的に解説する。

フォルマリストにとって自動化された実用言語とは、ことばの外の世界に効果を及ぼすために用いられるものである。Clarkらはここで、「ドアの開閉」に関わるやりとりを例にあげて説明する。たとえば、話し手の意志を示すための慣用的表現による「ドアを閉めろ」などのことばは、ことばの外にある事物や活動を指し示すものとして使用される実用言語として機能するという。なぜならば、このようなことばを聞いた聞き手はほとんどの場合、そのことばの意味について注意を払うことなく、ドアを閉めに行くなど、ことばが示す対象(この場合はドア)に意識を向けるからである。すなわち実用用語とは、先ほどの引用でシクロフスキーが述べているように、日常的な使用の中で、人々の認識にとってまるでガラスのように透明な存在となり、それそのものに対する認識が自動化されたものと考えられる。

一方Clarkらは、たとえば話し手が「かしこにある入り口の開放性を終焉させよ」ということばを使用した場合、事態は異なったものになると指摘する。このことばには、通常、このような場面では使用されない「かしこ」「開放性」「終焉」などの非慣習的な表現が多用されている。その結果、このようなことばを聞いた聞き手は、おそらくドアを閉める代わりに、そのことばそのものへの注意を引きつけられ、「なんだそのことばは」と質問することになるという。

このような場合のことばは、話者のメッセージを伝える媒体手段としての役割を離脱し、ことばそのものへの認識を高める詩的言語となるという。以上のように、自動化され急いで通り過ぎてしまう人々の言語知覚にブレーキをかけ、ことばそのものに対する人々の認識の焦点を当てる手法が、異化と呼ばれる方法論なのである。

そしてこの異化の具体例として、シクロフスキーが「手法としての芸術」の中で紹介した手法の一つが「事物をその名称で呼ばずに、初めて見たもののように描くこと(シクロフスキー, 1988b, p.26)」というものであった。たとえばトルストイはある論考において、「笞刑」という概念を、「法を犯した人々を身ぐるみはいで、床に這いつくばらせ、樹木の鞭で尻を打つ」というように、初めてそれをみる者のように生き生きと描き出すという異化を行っているシクロフスキーは指摘している。また別の小説(「ホルストメール」(1886))においてトルストイは、人間にとって当たり前となっている慣習的な社会的概念を、馬の視点から説明しなおすことによって、上記の異化を行っている論じている(シクロフスキー, 1988b, pp.26-28)。

このようにシクロフスキーが提唱した異化には、自動化された人々の言語的認識に変化を与えるために、他のことばによって目的のことばを解釈し、たとえることなどを通して、そのことばへの注意を集めるテキスト構成手法が含まれていたと考えられる。逆をいえば、このような自動化されたことばの意味を詳細に解釈したり、また解釈を求められたりすること(もしくはそれらのことばを聞くこと)は、慣習化された実用言語を使用する人々にとって、自らの言語的認識に「ブレーキ」をかけられる異様な行為としてうつると捉えられていたともいえるだろう。

以上の議論から、冒頭に分かったつもり現象を次のように解釈することの意味が可能だろう。すなわち、日常会話の中で用いることばの意味を説明できないからといって、人々がそれらのことばを理解していないわけではない。むしろ普段の会話の中で、いわば実用言語として自動化され、円滑に使用するという水準においては十分な理解が成立している。しかし、この分かったつもりという事態において、人々のことばに対する理解は、事物を示す指示器としての役割を果たすものに限定され、そのことばの意味をあえて他のことばによって説明する、いわば異化ができない状況に陥っていることが明らかになったのだと考えられる。

3. 「詩的言語と実用言語」から「対話形式と独語形式」へ

以上のシクロフスキーおよびヤクビンスキーの議論は、その後のフォルマリズム運動の理論的礎となっていた。特に詩的言語によって異化をもたらす言語構造の分析は、後のフォルマリズム運動における中心的なテーマとなり、プロットの構成や語り、パロディなどのテキストの分析が発展的に行われていくことになる。

しかしヤクビンスキーは1920年代に入り、これらのフォルマリストとは異なる、新たな言語分析の立場を模索するようになった。そしてその視点に基づく言語分析を「対話のことばについて」(1923)において展開したとされる(朝妻, 2005; Knox, 1979; Meng, 2004)。この新たな視点による議論は、『「実用言語」という用語が、非常に多くのさまざまなことばの現象を覆い隠している(Jakubinskij, 2004, p.392)』ということばに表されているように、詩的言語と実用言語という分類をやめることが出発点となった。そしてそれらは、個々の文脈や社会グループごとにみられる特殊な運用言語から個人内の思考においてみられる言語に至る分析によって、言語の多様性・多機能性について検討を行おうとするものとなった。

ヤクビンスキーは、言語にこのような多様性・多機能性をもたらす要因として、人々がそれぞれの意思を交わすコミュニケーション(註3)が行われる状況に着目した。そして、話し手と聞き手が直接対面した場面におけるコミュニケーションの形態(彼はこれを「直接的形式」と呼んだ)と、対面しない場合におけるコミュニケーションの形態(彼はこれを「間接的形式」と呼んだ)に焦点を合わせ、これらの違いがもたらす言語活動の多様性について分析を行ったのである。

まず話し手と聞き手が対面する直接的形式のコミュニケーションでは、ことばに加え、視覚的・聴覚的な多くの情報が交わされる(Jakubinskij, 2004, pp.395-398)。例えば「家」ということばを相手に伝える場合、そのことばを知らない相手であっても、このことばを発して指し示す対象をその相手と共同でみるという視覚的情報によって、意味の交換・理解が成立する可能性が高い。また話し手と聞き手は、お互いを直接知覚することができる。そのため、聞き手はことばと共に、話し手が発する表情や声のトーンなどの情報を得ることができ、これらを活用した話し手のジェスチャーなども利用可能とな

る。このことは、子どもがしばしば母親の表情に注目して、ことばのやりとりを行おうとする本能的な活動や、舞台上で交わされる会話を解釈するため、オペラグラスで役者たちの表情をみようとする観客の行動においてもみられるとされる(Jakubinskij, 2004, p.397)(註4)。

したがって、このようなコミュニケーション形態における言語活動では、情報伝達におけることばへの依存度が低くなる傾向にある。またこのような場面では、話し手のことばに即応して、聞き手からの応答発話が比較的速いテンポでなされることになる。その結果、話し手と聞き手の共同活動によって双方向的に意味交渉がなされ、一人一人が実際に口にするものことばそのものはさらに短くなる。

そしてこの直接的形式において典型的にみられる言語活動の形態を、ヤクビンスキーは「対話(ダイアログ)形式」と呼んだ(Jakubinskij, 2004, p. 393)(註5)。

この他に、話者間の慣習的要因が言語活動の形態に大きく影響を与える場合もある。ヤクビンスキーは、実際に交わされる言語的刺激だけではなく、先行する経験がもたらす心理的知覚によっても話者の情報処理が方向付けられるとし、この認知作用のことを「統覚」と呼んだ(Jakubinskij, 2004, p. 409)。そして同じ生活環境に属し、知覚・生活経験を共有した話し手と聞き手間では、この統覚の共通性が期待されるため(註6)、これらの過去経験については、言語化されることなく、現在、交わされる話題の方向性を認識することができるとした。そしてヤクビンスキーは、このように話者間において統覚の共通性が期待されるコミュニケーションが重ねられる中で、特定の社会文脈においてのみ通用する特殊な言語的結びつきやことばづかいを含む「社会的方言」が発生するようになる」と指摘した(Jakubinskij, 2004, p.417)(註7)。

以上のような要因が複合的に働いた結果、極端な場合、わずか一言だけでも必要な意味の情報が交換されることが可能になるという。この種のやりとりの事例として、ヤクビンスキーはドストエフスキーの「作家の日記」(1873)から、6人の酔っぱらいたちが、同じことばによって、それぞれ異なった意味をお互いに伝え合う場面を引用している(Jakubinskij, 2004, pp. 398-399)。

「一人の若者は、きっぱりと勢いのいい調子でこの名詞を発音して、前に一同が話していたなにものかに対する、思いきり侮辱のこもった否定を表明した。すると、

もう一人はその答えに、まったく同じ言葉をくり返したが、今度はもうまるで別な調子で、別な意味を持たせていた、つまり、最初の若者の否定の真実性に対する深い疑惑の念なのである。……こういう次第で、ほかの言葉は一つも口に出さないうで、彼らは後から後からと、前後六回続けざまに、このお気に入りの言葉ばかりくり返したのだが、それでもお互いに遺憾なく理解し合った。」(ドストエフスキー、1970, pp.132-133)

一方、話し手と聞き手が直接的に対面しない間接的形式のコミュニケーションでは、聞き手は話し手が指し示す具体的な事物や彼が発する表情、声のトーンなどの情報を共有することができない。そのため、必然的にことばそのものへの依存度が高まることになる。例えば「家」の意味を聞き手に伝える場合、話し手は「家とは、屋根が付いて雨がしのげる人が住むための場所」などというように、別のことばを駆使して詳細に説明をしなければならぬ。さらに間接的形式では、聞き手は直接、話し手に質問をすることができないことも多い。そのため話し手は直接的形式とは異なり、単独で全てのことばを構成する言語活動に従事しなければならなくなる。このような言語活動の典型的なやりとりとしては、書きことばによるコミュニケーションがあげられている。

そしてヤクビンスキーはこのような、間接的形式において典型的にみられる言語活動の形態を「独語(モノログ形式)」と呼んだ(Jakubinskij, 2004, p.393)。以上のような傾向はまた、話者間における統覚の共通性が期待できない場合に、より強くなると考えられた。

4. 対話形式と独語形式の相互関係性

しかし、これらの対話形式と独語形式は、直接的形式や間接的形式とのみ結びつく言語活動の形態ではなく、またお互いに独立・対立して存在するものでもない。むしろ、あらゆるコミュニケーションにおける言語活動は両者の要素を含んだものになると捉えられている(Jakubinskij, 2004, pp.393-395)。

例えば、話し手と聞き手が直接対面する直接的形式の状況であっても、話者間に共有する過去経験がなく統覚の共通性が期待できない場合の言語活動では、対話形式だけではなく、独語形式の要素も強くなると考えられる。ヤクビンスキーはこのようなやりとりの事例として、会

議や講演会などにおいて、多数の聞き手を相手にする弁士の言語活動をあげている(Jakubinskij, 2004, pp.403-404)。さらにこの定義からいえば、教室において多くの生徒たちと交わされる、教師の教授を目的としたやりとりにおいて使用されることばも、独語形式の特徴を強く帯びるだろう(Hoadley & Enyedy, 1999)。

一方、間接的形式の典型として指摘された、書きことばによるコミュニケーションにおいても、なお対話形式の要素がみられるという。それは書き手の読み手の反応を想定した逡巡のことばや、またそれを読む読者の応答的なメモ書きや感嘆の声などのことばにおいて、相手のことばに対して直接的に応答しようとする対話形式の特徴が読み取れるからである(Jakubinskij, 2004, p.403)(註8)。

さらにヤクビンスキーは、人間には飛び込んできた刺激に対して何らかの応答を行う「自然な(先天的な)」傾向があると考えていた(Jakubinskij, 2004, p.402)。そしてこの「自然さ」に従った言語活動の形式が対話であり(註9)、独語はこの自然さを抑制した「人工的な」形式になるとされた(註10)。独語が人工的とされたのは、長い独語形式の発話を可能にさせるためには、話し手の話を中断させずに聞き手は黙っておくというような文化的マナーや慣習、場合によっては聞き手の沈黙や同意を強制させる政治的な権力などの、言語外の圧力が必要になるとされたからである(Jakubinskij, 2004, pp.404)。

5. 独語形式と異化(生活文脈を越境する話者の意識性)

以上のようにヤクビンスキーは、対話形式と独語形式という言語活動の分類を通し、他のフォルマリストが行ってきたようなテキストそのものについての分析だけではなく、話者の相互的な関係性という超言語的な視点から言語的認識を検討しようとしていた(Bertau, 2005)。そしてこのような論点から、フォルマリズムの言語論が扱ったテーマについて、発展的な分析を行うことを目指していたのではないと思われる。その分析は、当時の言語学の視点にはほとんどみられなかった、話者の内省・意識への着目に結実した(Friedlich, 2005)。

話者同士が対面する直接的形式の状況における、対話形式によるコミュニケーションでは、これまでみてきた

ように、言語外の情報が重要な役割を果たす。また比較的速いテンポで話者が入れ替わる言語活動となるため、話者が発話を構成することばの選択について注意を払うことが少なくなる (Jakubinskij, 2004, pp.406-407)。そのため、さらに話者間においての統覚の共通性が期待される場合、話者のことばそのものに対する認識 (ヤクビンスキーはこれを、話者の「意識」と呼んだ) は低くなり、ことばの選択に対する熟考を行うことなく発話を行う傾向がみられる。そしてその結果として、日々の生活文脈の中で繰り返される言語の意味が「日常生活のパターン」の中で話者らの間で固定化されるようになる。つまりこのようなことばは、話者らの生活文脈に固有の社会的方言になるということである。ヤクビンスキーはこのような現象を、「化石化」と呼んだ。

「これらの語句は、いつも同じ日常状況の下で繰り返し利用されたために、いわば化石化し、複雑な統語論的モデルの性質はすっかり変わっている。・・・このような語句の再生産と結集は、慣れ親しんだ語句ないし不変の慣用句の再生産にたとえることができるような、慣れ親しんだパターンの再生産である (Jakubinskij, 2004, p.423)。」

そしてヤクビンスキーは、この化石化が示す話者の言語的認識の有り様を、かつて自らが提唱したフォルマリズムの基礎概念を使用して、「自動化」されたものになると呼んだ (Jakubinskij, 2004, p.427)。この自動化の作用は、話者らが同じ社会集団に属し、聞き手の反論などによって緊張を生じない慣用的な言語使用に際して強く生じる傾向にあるという (Jakubinskij, 2004, p.430)。

一方、話者同士が対面しない間接的形式の状況における、独語形式によるコミュニケーションでは、対話形式の状況とは異なり、言語外の情報を駆使することが困難となる。したがって、話者は自らの意志を表現するため、事前に言語構成について熟考を重ね、より複雑で文法的に完成度の高い発話を行うという、言語に対する高い意識性を必要とするようになる。

「単純明快な構成の対話とは対照的に、独語はいずれも構成的に複雑な現象である。言語材料の确实で複雑な配置という要素は大きな役割を果たし、またこのことは、(話者の) 明晰な意識、すなわち、言語的事実に対する注意深さを容易にもたらす (Jakubinskij, 2004, p.407)。」

また間接的形式のコミュニケーションだけでなく、話者が対面する直接的形式のコミュニケーションにおいても、普段の生活文脈で使用されない、不慣れなことばを使用して自分の意志を表現したり、また身近に接する機会のない相手に自分の意志を間違いなく伝えようとしたりするなどの場合に、話者の言語構成への意識性の高まりと注意の集中がみられるとされる (Jakubinskij, 2004, pp.425-426)。つまりヤクビンスキーは、コミュニケーションテーマに関わる前提知識を共有せず、もしくは不完全にしか共有せず、そのために統覚の共通性が期待しにくい (社会的方言の共有がなされない) 聞き手とのコミュニケーションにおいて、自動化された話者の言語的認識に、より明晰な意識性がもたらされると捉えていたのだと思われる。

以上のようなヤクビンスキーの認識はまた、彼の指導教員であった L. V. シチェルバによる、対話しかみられない農夫達の言語活動記録を、彼が引用していたことからもうかがうことができる。

「私は彼ら (農夫たち) が常に断片的な対話ばかりを話し、独語を全く話さないという現実を知って驚いた。私が滞在している間に、ライプチヒの定期市に出かけたり、また仕事で周辺の都市へ出向く人々もいたが、それらの旅行の印象を物語る者は一人としていなかった。彼らの談話は、多かれ少なかれ、生き生きとした対話に限定されていた (Jakubinskij, 2004, p.401)。」

この事例に出てきた農夫たちは、お互いに独語形式によるコミュニケーションを行わないため、彼らの話題の多くは結果的に、彼ら自身の生活圏内の出来事に限られていた。これは彼らにおいて、聞き手と文脈を共有しない話し手の経験を、独語として明確に言語化するような意識性に乏しかったことが原因と考えられる。

以上の議論から示唆されるのは、独語形式とは直接的形式・間接的形式を問わず、話者らが生活している文脈の外で経験した出来事のような、話者間の統覚の共通性が期待できないテーマに関する意志を伝えるコミュニケーションのために必要とされる言語活動の形態として捉えることが出来るということである。また同時に、この独語形式によるコミュニケーションは、言語に対する話者の高い意識を生じさせるものとしても意義づけが可能と思われる。

そしてここまでのヤクビンスキーの議論には、シクロフスキーによる異化概念の発展的包摂がみられるように思われる。聞き手がコミュニケーション場面を共有した場合の対話形式によるやりとりに参加する話し手の意識は、ことばそのものの意味というよりも、それらが指し示す対象物に焦点を当てている。そしてさらに彼が話し手と生活文脈をも共有する場合、統覚作用により、そこで交わされたことばの意味は両者の間で化石化され、結果として話者の言語に対する意識において自動化現象が生じる可能性が高い。しかし聞き手がコミュニケーション場面を共有せず、さらに生活文脈も異なる場合の独語形式によるやりとりでは、話し手はことばそのものへ注意を払わねばならない。つまり化石化され、話者らの意識において自動化されていたことばを他のことばに置き換え、相手に伝わることばに組み上げていくという複雑で鋭敏な言語意識の活動プロセスが必要となるのである。このことは、冒頭に紹介したシクロフスキーの「事物をその名称で呼ばずに、初めて見たもののように描く」という言語的結合が話者の自動化を破壊する異化と同様の作用を示すといえるのではないだろうか。

ヤクビンスキーは自動化の無意識性のために、話者の日常世界に対する視野が狭められてしまうと考え、話者が意識的に言語体系へ参加し、またその体系を外部へと開かせることができる、能動的な言語使用者とするための方法論を模索していたとされる(朝妻, 2005)。このような視点で読み解くと、異化は、異なる生活文脈を背景とする人物とのコミュニケーションを通し、生活文脈を共有する話者の言語的認識において自動化されたことば(社会的方言)を、他のことばで表現することによって再発掘する際にみられる現象として捉えることができるだろう。すなわち異化とは、詩的言語のように実用言語から切り離された言語体系における閉鎖的な現象としてではなく、異なる生活文脈間の越境的コミュニケーションにおいて、実用言語の多様化や革新を可能とする話者の高い意識をもたらす際に生じる心理現象として解釈が可能な概念なのではないかということである。

またこのような視点から本論の冒頭の問題を解釈すると、分かったつもりとは、対話形式によるコミュニケーションにおいて使用できるという意味では、ことばの「理解」は成立しているが、独語形式によるコミュニケーションにおいて、そのことばを使用できるという意味での「理解」までは成立しない話者の言語的認識を意味するということになるだろう。つまり自らの生活文脈内に

おいて、統覚の共通性が期待できる仲間との間で行うパターン化されたコミュニケーションにおいてはそのことばを自在に使用することができるが、そのことばを他のことばによって意味づけることにより、文脈外の人物とのコミュニケーションを行ったり、また文脈外で得た話者自らの経験を同じ生活文脈に住む仲間に伝えるために使用することは困難な状態ということである。その意味では、ことばの「理解」とは、言語使用者が生きる生活文脈を共有する相手とのコミュニケーションにおいてのみ使用できる自動化した水準と、そのような文脈を共有しない相手ともコミュニケーションを可能とする、いわば異化を伴う水準の二層構造を持つ言語的認識になると思われる。

6. ヤクビンスキーの対話形式とヴィゴツキーの生活的概念

ヤクビンスキーは、話者が伝えたいことを相手に的確に伝えることを可能とする、意識的で柔軟な言語的認識を高めていくことの重要性を強調していた。そしてそのための「言語技術論」と呼ぶ方法論までも提唱していた(ヤクビンスキー, 2005)。しかしこのような話者の言語的認識の成長過程に関しては、具体的な内容にまで踏み込んだ分析にまでは深められず、スローガ的な声明を述べるにとどまったとされる(朝妻, 2005)。

一方、フォルマリズムおよびヤクビンスキーの言語論から大きな影響を受けたとされるヴィゴツキーは(註1)、主に「思考と言語」(1934)において、ヤクビンスキーが言語分析に持ち込んだ話者の意識性の問題を「内言」の議論へと発展させることで(Friedlich, 2005)、ヤクビンスキー自身の論においては十分に明確化されない、話者の内的な言語的認識の成長・発達過程を具体的に検討したと考えられる。

そこで本節以降、ヤクビンスキーの議論と関連性が強いと考えられるヴィゴツキーの議論について分析し、両者の比較検討を行うことで、話者の言語的認識の発達に関する考察を深めていく。

ヴィゴツキー(2001, pp.398-402)は、ヤクビンスキーの対話形式および統覚の議論を引用した上で、会話文脈を共にした者同士においては、相手が既に知っていることが想定される共有経験(これを「主語」と呼んだ)に関する言語が省略されると指摘し、これを「述語主義」

と呼んだ。

「数人の人が電車停留所で、ある方面へいくために電車「B」を待っていると仮定しよう。電車がやってくるのに気づいたこれらの人のうちの誰もが、決して「私たちが待っているどこそ行き電車”B”が来ましたよ」というふうにはいわない。ただ一つの述語にまで省略された「きた」とか「B」というだろう（ヴィゴツキー、2001, p.399）。」

またこのような述語主義が進んだ例としてヴィゴツキーは、ヤクピンスキー論文の引用符なしに、ヤクピンスキーが紹介したドストエフスキーの「作家の日記」における酔っぱらいの事例を載せているほか（ヴィゴツキー、2001, pp.405-406）（註11）、特定の生活文脈を共有する人々の間だけに使用可能な「方言」が発生することも指摘している（ヴィゴツキー、2001, p.420）。そしてその事例として、トルストイが「幼年時代」「少年時代」「青年時代」において記述した、生活文脈を共有する人々の間で発生した「方言」をあげている。以下は、「青年時代」（1857）における、主人公と長い間生活を共にした兄弟との間で交わされた社会的な「方言」の事例である。

「乾し葡萄と言えば、自分にお金があることをひけらかしたい気持ちを表したし、瘤（シーシカと言うとき五本の指をくっつけて、二つのシに特に力点を置かねばならなかった）と言えば、何か新鮮で健康で優美で、しかも虚飾的ではないものを意味した。」（トルストイ、2009, p172）

一方、ヴィゴツキーは、話者の思考内においてもなお、この述語主義が生じるとした。すなわち話者間の言語コミュニケーションが後に、話者自身の思考として「内言化」されていくと考えたのである。この内言論を展開する中で、ヴィゴツキー（2001, p.405）はヤクピンスキーの論を引用し、話者との視聴覚的情報の共有を前提とする話しことばとは異なり、内言は話者が単独で言語構成を行うという意味で、書きことばと共に独語形式になると位置づけている。

しかし一方で、内言は同じ生活文脈を歩んできた自分自身を相手に行われるコミュニケーションでもあり、他の人物を相手とする対話形式による話しことばよりも述語主義は完全なものになるともされる。

「もし書きことばが、最大限に詳細なことばであり、話しことばにおいて主語をはぶかせるような状況がまったく欠けているという意味において話しことばとは正反対の極にあるものとすれば、内言もやはり話しことばとは正反対の極にあるものだが、しかしそれはまったく逆の関係においてである。なぜなら、そこでは絶対的な恒常的述語主義が支配しているからである。話しことばは、このようにして、書きことばと内言のちょうど中間の位置を占めている。」（ヴィゴツキー、2001, pp.409-410）

このヴィゴツキーの内言に関する「独語」論には、これまで本論で論じてきたヤクピンスキーのそれと比較すると、違和感を感じる。ヴィゴツキーはここで、実際に話者同士が直接対面しない「間接的形式」の意味合いで、内言を書きことばと共に独語形式になると論じているように思われる。しかしヤクピンスキーのいう「独語」とは主に、話者間に統覚の共通性の期待が生じにくいコミュニケーションにおける言語活動の形式を示したものであった。つまり内言とは、人生を共に過ごしてきた自分自身とコミュニケーションを行うことにより述語主義が徹底されるという意味では、ヤクピンスキーの論でいえば、むしろ統覚の共通性の期待によって生じる「対話形式」の言語構成作用が、「直接的形式」の話しことば以上に進んだものと捉えることができるように思われる。

このように述語化された内言は学齢期に至るまで、子ども自身の思考を媒介することになる。この内言は多くの場合、親や友人など生活文脈を共有した相手との、具体的な対象物を介したコミュニケーションから得られたものといえる。ヴィゴツキーはこのような具体的な生活場面において交わされることばを、「自然発生的概念」ないし「生活的概念」と総称した（中村、1998）。そして多くの子どもは、「兄弟」「太陽」「バラ」などの生活的概念の意味について、他者に対して、他のことばによって説明することがないとされた。ヴィゴツキーはこの傾向を、「教育過程の児童学的分析について」（1934）において「ガラスの理論」と呼んでいた。

「子どもが話しているとき、私たちが透明なガラスに気づかないように、彼はことばそのものに気づきませんが、それほど、彼の語と行為の背後にあるような、語が表示する対象や考えに心を奪われているのです。」（ヴィ

ゴツキー, 2003, p205)

ここで指摘されていることをヤクビンスキー論の視点で表現すれば、自動化された言語的認識による対話形式のことばが、生活的概念ということになるだろう。子どもたちは、具体的な指示対象物に囲まれる環境の中で生活的概念を獲得し、その環境を共有する話者との間で、生活文脈にパターン化された言語コミュニケーションを自在に行うことができる。またこれらの生活文脈を共有する人物との交流においては統覚の共通性も期待できるため、その言語構成はさらに省略されることになる。

しかし一方で、これらのことばは具体的な事象を指し示すものとして機能し、彼らの経験において述語化されている。そのため、子どもたちのこれらの言葉に対する認識は、いわばガラスのように透明な存在として自動化され、結果として、彼らの生活環境から切り離された人物とのコミュニケーションにおいて、ことばそのものの構造や意味について意識を高め、注意を向けることが困難になるのだと考えられる。

7. 内言の自覚性・随意性と科学的概念

しかし6節で述べたような子どもたちの内言は、学齢期に至ると変化することになる。学校教育において、文脈を共にしない他者を相手にする書きことばの習得を目指した「科学的概念」を養成する介入が、彼らに対して行われるようになるからである(佐藤, 2006)。ヴィゴツキーは、この書きことば能力の獲得を通した子どもたちの精神機能の変化を、意識あるいは内言の「自覚性」と「随意性」の獲得と捉えていた(中村, 2004a, 2004b; Wardekker, 1998)。

一般的には、「自覚」とは「勉強不足を自覚する」など、自分の能力や価値について自分自身が理解することを意味し、また随意とは、制限を受けず自由な状態のことを意味する(「広辞苑」)。しかしヴィゴツキーの議論において「自覚」とは、学んだことばの意味を別のことばによって解釈したり、他のことばとの体系的な関係を論理的に説明したりすることを(柴田, 2006)、また「随意」とは、このような「自覚」を通し、自らの内言・意識をことばによって自由に支配し制御できるようになることを意味する(中村, 1998)。

例をあげると、自覚性とは、学校の理科の授業で「(地球の)自転」ということばの意味を、子どもたちが「自

転というのは、・・・ということですよ」と日常経験のことばに置き換えて論理的に定義づけたり、また地球の自転を公転との関係から説明するなど、他の概念との関係を体系的に説明したりすることができるための内言の機能を示すと考えられる。また随意性は、他者から行われる質問に応じて柔軟にこの自覚的説明を調整できるなど、自らの内言をことばによって自由に制御できることを意味すると考えられる。

以上の定義内容からまた、内言の自覚性と随意性とは、ヤクビンスキーのいう独語形式によるコミュニケーションを可能とする精神機能を示すのだともいえる。ヤクビンスキーが述べた、独語形式によるコミュニケーションで必要となる、言語構成について熟考を重ね、複雑で文法的に完成度の高い発話を行うための、話者の言語に対する高い「意識」とは、すなわちことばによってことばを定義づけ、その活動を自由に行うことができるという、ヴィゴツキーの展開したこれらの内言機能によって達成されるものと思われるからである。

8. 内言の自覚性と随意性が導き出されるコミュニケーション場面・活かされるコミュニケーション場面とは

この内言の自覚性と随意性は、書きことばに限らず、自分の考えている内容を的確に聞き手に伝え、また聞き手の疑問に対応するために、自分の思考を柔軟かつ論理的に制御するための、重要な精神機能になると位置づけられている(ヴィゴツキー, 2003, pp.201-206)。

そしてヴィゴツキーは、このような能力が養成される具体的なコミュニケーション場面として、異なる意見を持つ他者の思考が、自分の思考と衝突する場面をあげている。この場合、幼い子どもたちは自分の意見を相手に一方的に押しつけ、ケンカ別れに終わることが多い。このような相手は、自分の意見を構成することばに対する主語の共有がなされない他者ともいえるだろう。そのため彼らに対して発することばは、必然的に述語主義を伴わない書きことば的な、いわば独語形式ののりとした言語化能力が必要になる。その結果、自分の思考活動を観察し、自由に論理的に制御していく内省機能が働く契機になると考えられるのである(柴田, 2006; 田島, 2009a)。

つまりヴィゴツキーのいう内言の自覚性と随意性とは、このような論争場面における独語形式のコミュニ

ケーションを通して育まれる精神機能を示すものと考えられるのである。このことは、「思春期の児童学」(1930)および「知的障害児の発達と補償の問題」(1931)の以下の引用文からもうかがうことができる。

「子どもの考えが他者の考えと衝突せず、他人の異なる考えに順応しようとすることがない限り、子どもは自分自身を自覚することができないのです。」(ヴィゴツキー, 2004, p.126)

「子どもたちだけではなく、私たち大人も自分の主張を言葉通りに信じてしまおうとする。すなわち証明を求めようとは、めったにしないのである。証拠について論理的に熟考をする必要性は、口論の機能のような集団的機能の発達に依存する。」(ヴィゴツキー, 2006, p.147)

またこのような言語活動の具体的な姿は、たとえば以下のような、子どもたち同士の話し合い場面においてみられると思われる。以下の事例は、「光を遮るもの」に関する理科実験を行った際に記録されたやりとりであるが、この内言の自覚性と随意性による交流の特徴が示されていると考えられる。

アラナ：なぜそう考えたの？
 ロス：だって、それは以前にテストしたことがあるから！
 アラナ：いいえ、ロス。あなたは何を考えたの？・・・どれくらいのティッシュが、ライトを遮るだろうと考えたの？
 ロス：最初は5枚だろうと考えたけど、次には・・・
 アラナ：なぜそのように考えたの？
 ロス：それがプロジェクターの中にあつたとき、少しみえたけど、全部みえたわけじゃなかった。だから、5枚のティッシュがライトを遮るだろうと考えたんだ。
 アラナ：それはいい理由ね。私は5枚から7枚の間じゃないかと思う。家の照明に一枚のティッシュをかざすと光が透けてみえるけれど、5枚から6枚の場合は、透けてみえない。だから私は5枚か6枚じゃないかと思うの。
 (Mercer, Dames, Wegerif & Sams, 2004, pp.368-369)

この事例においてアラナは、「なぜ」を多用し、実験道具がもたらす「遮光性」に関する推論の根拠について、

ロスの意見の自覚的な言語化を求め、また自らも、それに準じた意見陳述を行っていた。また当初はアラナの問いに対して拒否的な応答をしていたロスも、次第に「だから」などを使用し、次第に自分の意見に対する自覚性を高めていった。そしてこのようなやりとりを通し話者らは、たとえ意見が対立した場合でも、単に自分の意見を一方的に述べて対立するやりとりとは異なり、それぞれの見解をことばによって客観的に評価し、相互の意見を調整することができるようになったのだと思われる。その点でこの論争は、ヴィゴツキーのいう内言の自覚性と随意性を活かした、独語形式による言語活動の習得過程を示したものになると考えられるのである。Mercer (2000)は、このような談話を「探求的談話」と呼び、学校教育において育成が目指されるべき子どもたちの能力として捉えている。

そしてこのような探求的交流を可能にすることは、学習者らに対し、異なった文脈に住む人々とのコミュニケーションをも可能にすることになるだろう。これらの話者とのコミュニケーションでは、自らの意志を独語形式によって明確に言語化することが必要になるという点において、自分の意見に容易に同意しない相手と交渉を行う活動との同型性が指摘できるからである。これは、例えば「バラ」を彼らの生活文脈の中でみたことがない人に、バラの意味を相手にも分かる、他のことばで解釈するというような言語交渉を示す。

探求的談話のような言語活動は、異なった文脈をまたぐコミュニケーションを可能とするという意味で「再文脈化」とも呼ばれる(Mercer, 1992; 茂呂, 1988; van Oers, 1998)。茂呂は、書きことば能力を身に付けることの意義を、異文脈に属する話者間で記号を操作することにより、新たな文脈を豊かに再構成する交渉能力の獲得とみている。さらに van Oers は、この再文脈化による対話は、ヴィゴツキーのいう内言の自覚性と随意性によって可能になるものと主張している。すなわちヤクビンスキー論の視点からいえば、話者の所属文脈における日常生活のパターンにおいて化石化したことばを、他の文脈の人々との独語形式によるコミュニケーションにおいて使用することを通し、新たな言語的認識によって意味づける活動が再文脈化になると考えられるのである(註12)。

9. 対話形式と独語形式の円環的接触としての「発達」

しかしこの自覚性と随意性は、特に学校教育が始まった当初は、教師との共同活動の中で習得した科学的概念の内言領域においてのみ操作可能なものとされる。

「子どもは、アルキメデスの法則とは何かを、兄弟とは何かよりもうまく定式化することは、よく知られた事実である。」(ヴィゴツキー, 2001, p.244)

書きことばを基本とする科学的概念そのものは、他のことばによってことばの意味を構築するという、話者の内言の自覚性と随意性を促進する体系性をその言語構造として有している。しかしそれを学習する子ども達にとっては、かなりの期間、彼ら自身の自律的な内言(生活的概念の領域)においてそれらを機能させることが困難ということである。つまり多くの場合、子どもたちの学習は、教師のことばをそのまま繰り返すような、形式的で模倣的なものに陥る傾向となり、科学的概念は単に知識として覚えられるのみで、自律的な内言の機能にまでこの自覚性と随意性が及ばない期間が生じるようになると考えられる。このような科学的概念の習得状況をヴィゴツキー(1975, p.114)は、「ことば主義」と呼んだ。

しかし、教師との共同作業を通して習得した自覚性と随意性は、次第に子ども達単独の内言において自律的に機能するようになる。つまり、科学的概念だけではなく、生活的概念の領域においても自覚性と随意性がもたらされることになる。ヴィゴツキーはこのような、教師など大人との共同作業において得られ、次第に子ども単独の自律的な思考として拡張しつつある認知領域を、「次に続く発達の領域」という意味で「発達の最近接領域」と呼んだ(中村, 2004b)。

「科学的概念の発達は、自覚性と随意性の領域においてはじまり、その後個人的経験や具体性の領域へ、下へ向かって成長する。自然発生的概念の発達は、具体性と経験の領域においてはじまり、概念の高次の特性-自覚性と随意性-へ向かって運動する。・・・概念の自覚性と随意性という、生徒の自然発生的概念にはまだ未発達な特性は、完全に彼らの発達の最近接領域にあるということ、つまり、大人思想との共同の中で顕現し、活動をはじめるといふことである。このことは、われわれに

科学的概念の発達の前提は自然発生的概念の一定の高さの水準-そこでは発達の最近接領域に自覚性と随意性があらわれる-を前提とするということ、科学的概念は自然発生的概念を改造し、高い水準に引き上げ、それらの発達の最近接領域を実現させること、つまり子どもが今日共同の中でなし得ることは、明日には自分一人でもなし得るようになるということの説明する。」(ヴィゴツキー, 2001, p.318)

例えば、「水」「太陽」「兄弟」のようなことばは就学前の子どもたちにとって、彼らの日常経験文脈における、対話形式のやりとりの中で学習されてきた生活的概念に属する知識といえる。その一方で、定義的に意味づけられ、さらにまた新たなことばを定義づけていく体系的な科学的概念として使用され得るものでもある。子どもたちは大人との教授・学習関係を通し、ことば主義的に獲得した科学的概念については生活的概念による裏付けを行うことによって、また体系的に欠けた生活的概念については自覚性と随意性を伴わせることによって、自律的な内言として改造する。このようにヴィゴツキーは「発達」を、単に知識の蓄積過程としてではなく、科学的概念・生活的概念も含め、すべての概念が子どもの自律的な内言における体系性として機能していく成長過程として捉えていたのだと考えられる(中村, 2004b)。

このことからまた、ヴィゴツキーのいう「発達」とは、ヤクビンスキーの言語論から導き出された、異なる文脈間のコミュニケーションを可能とする話者の言語的認識の、心理的な成長過程を具体的に明らかにしたものとしても解釈できると思われる。主語を共有しない(統覚の共通性が期待できない)他者とのコミュニケーションは、日常経験の中で円滑な(自動化した)交流を行っていた者にとっては、驚きを伴う困難な経験になるだろう。しかしヤクビンスキー自身も言及していたように、このような他者との独語形式によるコミュニケーションを通して、ことばの意味や構造について認識を深めることにより、話者の高い意識(内言の自覚性と随意性)をもたらすことにもなると思われる。

ヤクビンスキーとヴィゴツキーの言語論について比較分析を行った Bertau (2005) は、子どもの言語的成長を、大人とのやりとりを通し、話者の属する文脈に埋め込まれたコミュニケーションと異文脈にまたがるコミュニケーションを相互に可能とすることと捉えている。まさにこのような、対話形式と独語形式の円環的接触によ

る話者の言語的認識の成長過程こそ、ヴィゴツキーのいう「発達」が示すものになるのではないだろうか。

したがって、話者にとってのことばの「理解」とは、生活文脈を共有する相手とのコミュニケーションにおいて使用できる水準（すなわち「分かったつもり」）および、そのような文脈を共有しない相手との再文脈化を伴うコミュニケーションにおいて使用できる水準の両水準を達成した言語的認識として捉えられるのである。

10. ヤクビンスキーおよびヴィゴツキー論を通して得られる「分かったつもり」および「理解」の構造

本論ではシクロフスキーからヤクビンスキーに至るロシア・フォルマリズムの言語論の変遷に焦点を合わせ、またヴィゴツキー理論におけるそれとの関連性を検討することを通して、ことばの「理解」および「分かったつもり」の構造について論じてきた。これらの視点を導入することによって明確になったのは、ことばの「理解」とは話し手-聞き手のコミュニケーション場面の違いによって、また両者が属する生活文脈の違いによって、その姿を大きく変えるということである。

本論のこの視点からみると、冒頭で紹介した「分かったつもり」とは、生活文脈を共有する者同士の対話形式によるコミュニケーションに使用できるという意味では、「理解」が成立していた言語的認識と捉えられた。しかし同時に、その文脈外の人々とコミュニケーションを行ったり、文脈外で得た経験を仲間に伝えたりするために必要となる、内言の自覚性と随意性を伴う独語形式のやりとりには使用できないような言語的認識でもあった。そして本論において新たに捉えられた「理解」とは、この「分かったつもり」ととどまることなく、対話形式におけるコミュニケーションも、また独語形式によるコミュニケーションも可能とする、柔軟な言語的認識を示すものであった。

無論、我々が交わす全てのことばが、独語形式によるコミュニケーションを可能とする水準の「理解」となる必要はないだろう。冒頭の「トルク」の事例に関しても、そのことばを使用する人々にとって、生活文脈外の人物とのやりとりに使用される機会も必要性もそれまでなかったからこそ、ベテラン整備士においてもなお分かったままだったのだとも考えられる。その意味で、

彼のこの言語的認識は、決して彼の生活圏内における無能さを示したものではないのである。

一方、現代社会においては、異なる専門家同士がコミュニケーションを重ね、共同で仕事を行う機会が加速度的に増加している（Engeström, Engeström & Kärkkäinen, 1995）。つまり、異なった文脈に住み、様々な背景を持つ人々との交渉を行わなければならない機会が増加しているため、仕事を行う上で、自らの慣れ親しんだ文脈の中でとどまることは困難になりつつあるということである。

このような状況に対応するため、今後は、より多くの学習者が、少なくともそれぞれのやりとりを遂行する上で重要となるテーマに関わることばについては、分かったつもり水準にとどまることなく、対話形式と独語形式の円環的接触を可能とする水準の理解を達成・遂行する必要があると考えられる。たとえ一時的には分かったつもり水準で学習者らの生活に支障はないとしても、将来、生活文脈外の人物と独語形式によるやりとりを行わなければならない可能性は常に存在し続けるからである。そして、このような社会に子どもたちを送り出す学校教育においては、その教授・学習活動を通し、彼らに再文脈化を可能とするための、柔軟な思考力をこれまで以上に積極的に育成する必要があるだろう（註13）。

このように丁寧な言語化を伴った独語形式によるコミュニケーションを可能とすることは、話者のコミュニケーションの幅を広げ、そして新たな言語活動をもたらす文脈を生じさせることにもつながるだろう。その観点からみれば、ヤクビンスキーおよびヴィゴツキーの独語論を通して解釈できる理解としての言語的認識とは、生活文脈間の自由な越境的言語コミュニケーションを可能とするという意味で「旅券としての理解」と呼ぶことができるかもしれない。そしてこのようなことばの「理解」像は、頻繁に文脈間の移動が行われる機会が増加したこの現代社会においてこそ、特に価値のあるものになるのではないだろうか。

【註】

（註1）ヴィゴツキーは、多くの場合、直接的な引用符を明示しなかったにもかかわらず、ヤクビンスキーの言語論をはじめとするフォルマリズム論の意義を評価し、大きな影響を受けていたとされる（Knox, 1979; Wertsch, 1985）。Knoxは、ヴィゴツキーがヤクビンスキー論文からの引用符を積極的に示さない理由として、すでに

1930年代においてヤクビンスキーは、他のフォルマリストと同様、「好ましからざる人物」となっていたという要因をあげている。また高木(2001)は、ヴィゴツキーが自動化や異化などのフォルマリズムの議論から影響を受けていると論じた上で、彼の実験手法が実験協力者である子どもたちに異化をもたらし、意図的に彼らのコミュニケーションパターンを破壊することで、言語的認識の発生過程を検証するものであったと指摘している。

(註2)「対話のことばについて」の訳書については、英語ではKnox & Barnaによるもの(Jakubinskij, 1979)とEskinによるもの(Yakubinsky, 1997)、またドイツ語ではHommel & Mengによるもの(Jakubinskij, 2004)を入手した。このうち英語訳はいずれも、ドイツ語訳と比較して、後年のヤクビンスキーに関する研究論文において引用されている箇所を多くを省略しており、抄訳の程度が高いものと判断した。そのため、本論の執筆においてはドイツ語訳を採用した。

(註3)このようなやりとりは通常、「対話」と呼ばれることが多いと思われる。しかしヤクビンスキーは、このやりとりを支える言語活動の形式を分類した「対話形式」および「独語形式」というカテゴリーを提案することを通し、話者相互の意志交換としてのやりとりの分析を論じている。本論文においては、言語活動の形式としての「対話」と区別して論じることを目的として、この意志伝達行為を「コミュニケーション」と呼ぶことにした。

(註4)この箇所は、後にヴィゴツキー理論に触発されたScaife & Bruner(1975)やTomasello(1999)らによって展開される、乳児期の言語学習において母子相互間の表情が果たす役割に着目した「共同注意」論に関連した先駆的議論としても、注目すべき記述と考えられる。

(註5)この「対話」(および後に説明を行う「独語」)の概念は、元々、ヤクビンスキーの指導教官でもあったL.V.シチュルバの著書である「東ルサチアの方言」において偶発的に述べられていたものを、ヤクビンスキーが「対話のことばについて」において理論化したものとされる(Knox, 1979; Meng, 1984)。

(註6)このような「統覚の共通性」は、あくまでもコミュニケーションを行う話者がお互いに「期待」するもので

あり、実体のあるものとしてこの「共通性」が存在するわけではないことは指摘しておかねばならない。聞き手の認知としての統覚そのものを、話し手は実際にみることはできないからである。以降の考察においても、話者が聞き手に期待する仮説の意味として、「統覚の共通性」という用語を使用している。

(註7)この分析に関しては、バフチンの「ことばのジャンル」論への影響を指摘することができる(朝妻, 2005)。またバフチン自身も、対話概念や所与の文脈に特殊化された言語に関するヤクビンスキー論の影響を認めているとされる(Knox, 1979)。このことに関連しKnoxは、対話概念に関する唯一の貢献者がバフチンであるとする論者がいることを批判し、バフチンサークルが「ドストエフスキーの詩学」(1929)や「マルクス主義と言語哲学」(1929)を執筆するに当たり、対話概念も含め、ヤクビンスキーの論から広範な影響を受けている点を無視してはならないとも指摘している。

(註8)また、統覚の共通性を期待できる相手との書きことばによるやりとりも、対話形式に近い性質を持つだろう。ヤクビンスキー自身は電報を通じたコミュニケーションを、その例としてあげている。また現代においては、親しい仲間同士の間で交わすことが多いケータイメールのやりとりなどが該当するだろう(田島, 2009b)。このようなコミュニケーションにおいては、文法的に不完全で、話者同士が共有する過去経験を知らなければ理解できない、いわば対話形式の特徴を持つ書きことばが使用される傾向が強くなるとされるからである。

(註9)このような自然傾向の存在を典型的に示す事例としてJakubinskij(2004, p.402)は、「食事中、食べ物をほおばった人物に話しかけてはいけない」というルールをあげている。なぜこのようなルールが存在するかといえば、食事中であっても話しかけられた人物は、この「自然」傾向に従い、そのことばに反応しようとして、むせ込んでしまうからとされる。

(註10)対話の自然さと独語の人工性についても、シチュルバが先行して言及したものである。しかしヤクビンスキー自身の言葉によれば、シチュルバの研究において、これらの概念提示は偶発的なものであり、体系的理論に

まで展開されたものではなかった。

(註11) このようにヴィゴツキーが、ヤクピンスキーの引用した箇所と同じ文章を紹介していることは、ヤクピンスキーがヴィゴツキー理論に与えた影響の強さを示す証拠とされている(桑野, 1977; Wertsch, 1985)。

(註12) ただし、異なる文脈とのコミュニケーションを通して創出されたことばの意味は、新たな文脈の中で再び固定化・慣用化する可能性はある。したがって再文脈化は、このような特定の文脈の意味に固定化することなく、常に異文脈との新たな再交渉に対して開かれていることが前提になる概念であることも担保しておく必要があるだろう。その意味では本概念は、慣用的に使い古されたことばを嫌い、常に話者の言語的認識の刷新を目指すという、シクロフスキーのいう異化が示した作用とも響き合うものと考えられる。

(註13) ヴィゴツキーは、発達を組織化するための具体的な教育介入の方法に関しては、明確な提案は行わなかったとされる(中村, 1998)。ヴィゴツキーにおいてこの発達の移行は、子どもたち自身の自発的な能力によって、青年期に達成されると捉えられていたようである。しかし田島ら(田島・茂呂, 2003; 田島, 2010)は、青年期以降においてもなお、多くの者が自らの学習概念に対し、必ずしも自覚性と随意性を発揮できているわけではないという実態を明らかにしており、学習者の発達を促すための教育介入が必要であると主張している。

一方、ヴィゴツキーは、書きことばの教育方法については具体的な示唆を行っていた。例えば、「子どもの想像力と創造」(1930)において、子どもたちの書きことばの発達を促進する上で、離れた所に住む相手にメッセージを送る手紙を書くなどの具体的なコミュニケーションを設定し、経験させることが重要であると指摘しているからである(ヴィゴツキー, 2002, pp.75-81)。このことから、内言の自覚性と随意性を獲得させる上でも、このような介入は効果があると示唆される。

そしてこのヴィゴツキーの示唆を裏付ける実証研究も、近年、行われてきている。学校で学習した科学的概念について、分かったつもりに陥った学習者であっても、その内容を知らない他文脈に住む他者を相手に想定して概念の意味の説明を行う対話経験を経ると、生活的概念と科学的概念を関連づけ、自分なりの解釈を行える

ようになる(すなわち、概念に対し自覚的になる)者が増加することが、実験および実践介入データから明らかになっている(田島, 2008; 田島・茂呂, 2006; 田島・森田, 2009)。

【引用文献】

- 朝妻恵里子 2005 「言語の「機能」をめぐって：ヤクピンスキーの意義と限界」『言語情報科学』3, 1-14.
- オクチュリエ, M. 桑野隆・赤塚若樹(訳) 1996 『ロシア・フォルマリズム』 白水社
- ベルグソン, H. 合田正人・松本力(訳) 2007 『物質と記憶』 筑摩書房
- Bertau, M.C. 2005 Eine dialogische Sichtweise für die Psycholinguistik. *Die Abhandlung für Interdisziplinäre Tagung im Sommer 2005 Ludwig-Maximilians-Universität, München*, 18-28.
- ドストエフスキー, F.M. 米川正夫(訳) 1970 『作家の日記』 河出書房新社
- Clark, K., & Holquist, M. 1984 Mikhail Bakhtin. Harvard University Press.
- Engeström, Y., Engeström, R. & Kärkkäinen, M. 1995 Polycontextuality and boundary crossing in expert cognition: Learning and problem solving in complex work activities. *Learning and Instruction*, 5, 319-336.
- Friedrich, J. 2005 Verwendung und Funktion des Dialogbegriffs im sowjetrussischen Diskurs der 1920er Jahre, insbesondere bei Jakubinskij und Vygotskij. *Die Abhandlung für Interdisziplinäre Tagung im Sommer 2005 Ludwig-Maximilians-Universität, München*, 5-17.
- Hoadley, C.M. & Enyedy, N. 1999 Between information and communication: Middle spaces in computer media for learning. *Computer Support for Collaborative Learning*, 30, 242-251.
- ヤクピンスキー, L.P. 1971 新谷敬三郎・磯谷孝(訳)「詩語の音について」新谷敬三郎・磯谷孝(編訳)『ロシア・フォルマリズム論集：詩的言語の分析』現代思潮社, pp.59-64.
- Jakubinskij, L.P. 1979 On verbal dialogue (Knox, J.E. & Barna, L. translate). *Dispositio*, 4, 321-336.
- ヤクピンスキー, L. P. 1988 服部文昭(訳)「実用言語と詩的言語における同一流音の重なり」桑野隆・大石雅彦(編)『ロシア・アヴァンギャルド⑥フォル

- マリズム：詩的言語論』国書刊行会，pp.36-42.
- Jakubinskij, L.P. 2004 Über die dialogische Rede (Hommel, K. & Meng, K. translate) In E. Konrad & K. Meng. (Eds.), *Die Aktualität des Verdrängten: Studien zur Geschichte der Sprachwissenschaft im 20. Jahrhundert*. Synchron, pp.383-433.
- ヤクビンスキー, L.P. 桑野隆 (訳) 2005 「レーニンにおける高尚な文体の格下げについて」 桑野隆 (編訳)『記号学的実践②レーニンの言語』水声社, pp.53-76.
- Knox, J.E. 1979 Lev Jakubinskij as a precursor to modern Soviet semiotics, *Dispositio*, 4, 317-320.
- 桑野隆 1977 「ヴィゴツキイとバフチーン」『窓』23, 10-13.
- 桑野隆 1979 『ソ連言語理論小史：ボードアン・ド・クルトネからロシア・フォルマリズムへ』三一書房.
- Meng, K. 1984 L.P.Jakubinskij und der Beginn der sowjetischen Dialogforschung. *ZPSK*, 37, 26-36.
- Meng, K. 2004 Lev Jakubinskij. In K. Konrad & K. Meng. (Eds.), *Die Aktualität des Verdrängten: Studien zur Geschichte der Sprachwissenschaft im 20. Jahrhundert*. Synchron, pp.377-382.
- Mercer, N. 1992 Culture, context and the construction of knowledge in the classroom. In P. Light & G Butterworth (Eds.), *Context and cognition: Ways of learning and knowing* (pp.28-46). Erlbaum Associates Inc.
- Mercer, N., 2000 *Words and minds: How we use language to think together*. Routledge.
- Mercer, N., Dawes, L., Wegerif, R., & Sams, C. 2004 Reasoning as a scientist: Ways of helping children to use language to learn science. *British Educational Research Journal*, 30, 359-377.
- 茂呂雄二 1988 『なぜ人は書くのか』東京大学出版会
- 中村和夫 1998 『ヴィゴツキーの発達論：文化-歴史的理論の形成と展開』東京大学出版会.
- 中村和夫 2004a 「ヴィゴツキーの内言理論における「意味」の存在形態について：想像の発達論を手がかりに」『心理科学』24, 55-69.
- 中村和夫 2004b 『ヴィゴツキー心理学完全読本：「最近接発達の領域」と「内言」の概念を読み解く』新読書社.
- 佐藤雄大 2006 「第二言語習得における「最近接発達の領域」」『ヴィゴツキー学』7, 19-26.
- 柴田義松 2006 『ヴィゴツキー入門』寺子屋新書.
- Scaife, M. & Bruner, J. S. 1975 The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, 253, 265-266.
- シクロフスキー, V. B. 坂倉千鶴 (訳) 1988a 「言葉の復活」桑野隆・大石雅彦 (編) 『ロシア・アヴァンギャルド⑥フォルマリズム：詩的言語論』国書刊行会, pp.13-19.
- シクロフスキー, V. B. 松原明 (訳) 1988b 「手法としての芸術」桑野隆・大石雅彦 (編) 『ロシア・アヴァンギャルド⑥フォルマリズム：詩的言語論』国書刊行会, pp.20-35.
- 田島充士 2008 「再声化介入が概念理解の達成を促進する効果：バフチン理論の視点から」『教育心理学研究』56, 318-329.
- 田島充士 2009a 「ヴィゴツキーと子育て支援」繁多進 (編) 『子育て支援の心理学：実践のための基礎知識』新曜社, pp.97-108.
- 田島充士 2009b 「青年の文化：携帯電話を中心に」宮下一博 (監修) 松島公望・橋本広信 (編) 『ようこそ！青年心理学：若者たちは何処から来て何処へ行くのか』ナカニシヤ出版, pp.81-90.
- 田島充士 2010 「「分かったつもり」のしくみをさぐる：バフチンおよびヴィゴツキー理論の観点から」ナカニシヤ出版.
- 田島充士・茂呂雄二 2003 「素朴概念の理論的再検討と概念学習モデルの提案：なぜ我々は「分かったつもり」になるのか?」『筑波大学心理学研究』26, 83-93.
- 田島充士・茂呂雄二 2006 「科学的概念と日常経験知間の矛盾を解消するための対話を通じた概念理解の検討」『教育心理学研究』54, 12-24.
- 田島充士・森田和良 2009 「説明活動が概念理解の促進に及ぼす効果：バフチン理論の「対話」の観点から」『教育心理学研究』57, 478-490.
- 高木光太郎 2001 『ヴィゴツキーの方法：崩れと振動の心理学』金子書房
- トルストイ, L.N. 北御門次郎 (訳) 2009 『青年時代』講談社
- Tomasello, M. 1999 *The cultural origins of human cognition*. Harvard University Press.
- van Oers, B. 1998 The Fallacy of Decontextualization. *Mind, Culture, and Activity*, 5, 135-142.

- ヴィゴツキー, L.S. 柴田義松・森岡修一(訳) 1975
「生活的概念と科学的概念の発達」 柴田義松・森岡
修一(編訳) 『子どもの知的発達と教授』 明治図
書, pp.96-123.
- ヴィゴツキー, L.S. 柴田義松(訳) 2001 『思考と言
語』 新読書社.
- ヴィゴツキー, L.S. 広瀬信雄(訳) 2002 『子ども
の想像力と創造』 新読書社.
- ヴィゴツキー, L.S. 土井捷三・神谷栄司(訳) 2003 「教
育過程の児童学的分析について」 土井捷三・神谷
栄司(編訳) 『「発達の最近接領域」の理論』 三学
出版, pp.187-218.
- ヴィゴツキー, L.S. 柴田義松・森岡修一・中村和夫(訳)
2004 『思春期の心理学』 新読書社.
- ヴィゴツキー, L.S. 柴田義松(訳) 2006 「知的障害
児の発達と補償の問題」 柴田義松・宮坂瑠子(編訳)
『障害児発達・教育論集』 新読書社, pp.135-162.
- Wardekker, W. 1998 Scientific Concepts and Reflection. *Mind,
Culture and Activity*, 5, 143-153.
- Wertsch, J.V. 1985 *Vygotsky and the social formation of mind*.
Harvard University Press.
- Yakubinsky, L.P. 1997 On dialogic speech (Eskin, M.
transl.), *PMLA*, 112, 243-256.

【謝辞】

本論文を作成するにあたり、広島大学大学院教育学研
究科の岡花祈一郎氏から、多くの貴重なご助言を頂いた。
ここに記して、感謝申し上げたい。